

## 母子の相互行為における指さし

— 日本・中国・米国の共同行為の比較 —

文京学院大学  
日本獣医生命科学大学

上村佳世子  
柿沼美紀

### Pointing in mother-child interactions

: How mothers and children in Japan, China, and the United States  
organize their narrative

Bunkyo Gakuin University

UEMURA, Kayoko

Nippon Veterinary and Animal Science University

KAKINUMA, Miki

母子が共同でつくる語りのなかで生起する指さしの地域差を検討した。行為によって引き起こされるトラブルを暗示する線画について、それぞれの地域の母子の言及の内容と指さしに違いがみられた。母親の指さしの時間や長さには、大きな地域差が示されなかったのに対して、子どもの指さし行動の持続時間は中国、日本、米国の順に長かった。米国の子どもは全体として指さしを母親に抑制されるなかで、子ども自身の発話の主語および目的語、発話のテーマと連動して生起したのに対して、日本の子どもは対象物の所有者配分や絵画のなかの人物の意図を示す発話を補足する形で生起した。指さしは語りスタイルの違いに即してそれぞれの地域で差異がみられたが、語り内容を強調したり補足したりして言語行為と相手の理解を拡大する機能を果たすという共通性が示唆された。

**【キー・ワード】 母子の語り, 指さし, 地域差, 相互行為**

Pointing in mother-child interactions occurring during the joint storytelling session is compared across areas of residence. The total amount of pointing by mothers did not differ much when talking about pictures depicting some interpersonal conflicts. On the other hand, children's pointing behavior differed. Children in China showed used most pointing and the US the least. Mothers in US tend to prohibit children to point during the session, and children used pointing in relation to the subject, object or themes closely related to the content of the talk. Children in Japan tend to point to supplement what they cannot explain verbally, often in relation to the internal state of the people in the pictures. Even though contents of the pointing differed, the purpose of pointing, as a way to supply verbal information was the same.

**【Key words】 mother-child joint storytelling, pointing, areas of residence, interaction**

## はじめに

人間が問題解決場面において対処の判断をする際に、場面からどのような種類の情報を抽出しそこから欠けた情報を想定して一連の物語をつくり文脈全体を意味づけしていくかには個人差がある(東, 2002)。子どもは親との共同行為に参加することでその生活文化に固有で適応的な対処のスタイルを獲得し、認知的枠組を獲得していく。とくに、親が幼児との共同的な語り場面において他者の行為や出来事をどのように語るかは、子どもにとっては教示-学習過程をととした情報処理方略の獲得の機会であり、かれらにとって注目すべき要因に焦点がしばられ、発話スタイルが選択され方向づけられるものと考えられる。

Kakinuma, Uemura, Jing, Jin, & Mayuzumi (2005)は、線画を提示して日本および中国の母子に自由に語ってもらい、日本の母子が行為者の意図や感情について複数の可能性を考慮し、行為の結果の解釈を善意に求めることが多かったのに対して、中国では行為者の意図を悪意に解釈してそれがもたらす結果を事例として提示するケースが多いことを示した。Fivush & Wang (2005)の母子の語りのスタイルの違いの比較研究では、アメリカの母親は他者の情緒に触れたときに子どもがその原因に焦点をあて、自分の意見や感情状態を述べるよう求めることが多かったのに対して、中国の母親は、子どもに情動的経験を他者と共有し、情緒を社会的行為の結果をとらえることを求める頻度が高いことを示された。語りとして人間の行為の原因を論理的に理解し表現する方略をとるのか、道徳的観念に照らして情緒的に訴える方略をとるのかというスタイルに、地域による思考の方向や問題解決の違いが特徴的に示された。

指さしは、前言語期に示されるコミュニケーション方略のひとつであり、記号的な機能をもっている。他者の注意を事物に向けようとする原叙述の指さしは、他者が注意の対象を知覚していることを理解していることが前提であり、理解においても表出においても認知的に複雑であると考えられている(小椋, 2005)。しかし、指さしは指がさされるものを代表するわけではなく、指は単に指示する道具であるともされている。語りという言語活動のなかで指さしが出出する機会が多いが、その機能についての詳細な記述や文化および地域における違いを示す研究は十分におこなわれているとは言えないものの、これが特定の対象に感心を向け注意を共有するための重要な機能を果たしていることは間違いない。

母子の語り場面における語り内容の違いは、国家を隔てる地域(柿沼・上村・静, 2006)にも日本国内の地域差(上村・柿沼, 2006)にもみられる。人の出入りの多い地域では、状況を他者との人間関係に帰属させ、多様な選択肢の中で可能性の高そうなひとつを考えさせるという形式で母子の語りが進められた。一方の人の出入りの少ない地域では、人間関係の対立を暗示する場面では問題解決については語っても、対立の原因を暗示する対象物に言及することは避ける傾向が示された。そこには、人の凝集性や他者との距離など、それぞれの生活環境に適應する上で必要となる情報が選択されると同時に、習慣としてある状況の解釈や対象方略の枠組みが提示されているものと考えられる。子どもは親との共同行為に参加することによって、適応的なもの見かたや語りのスタイルを獲得していく。こうした親子の語り内容の違いは、そこに生起する指さしなどの非言語行動の形態や機能にも反映す

ることが予想される。地域によるその違いに焦点をあてることは、言語の統語論的な違いや微妙な語彙の違いという直接的な制約を受けることなく、地域の差を検討する上で有効な切り口になる。また、指さしと言語行為との対応をみることは、親子の共同行為における子どもの情報および対処方略の獲得とそれに対する親の足場づくり(scaffolding; Bruner, 1986)の具体的過程を検討する上でもひとつの手段となるものと考えられる。

本研究では、人間関係の対立を暗示する線画を介した母子の語り場面において、日本、中国、米国のそれぞれの地域の指さしがどの程度生起し、どのような役割を果たすかを明らかにすることを目的とした。具体的には、1)課題遂行中に母子が線画をどこに置き、いずれが絵に触れていたか、2)母子がどの程度指さしをおこなったか、それはどの程度言語的情報と関連していたかについて、それぞれの地域で差異がみられるかを検討した。

## 方 法

**研究参加者：** 3歳から5歳の日本、中国、米国の幼児とその母親を対象とした。日本は東京在住の20組、中国は広州市在住の20組、米国はスタンフォード市近郊在住の18組で、それぞれの地域の紹介者を介して依頼をし、承諾の得られた母子について参加を求めた。

**課 題：** Wakabayashi, Fernald & Kakinuma (1999)で使用した4枚の線画(図1参照)を刺激として提示し、柿沼(2001)の手続きと同様に、時間の制限や絵の順番などを含めとくに制限をせずに母子に自由に語ってもらった。課題は、日本では対象者の自宅ないしは友人宅、中国では幼稚園、米国では自宅というように、子どもが日常的に慣れている場面で実施した。ことばに関する母子の違和感をできるだけ回避するために、それぞれの地域の言語を母国語とする女性に教示してもらった。いずれも母親に、絵を見ながら子どもと一緒に自由話をしてもらうよう依頼し、その様子すべての映像および音声を記録し、発話のトランスクリプションを作成した。

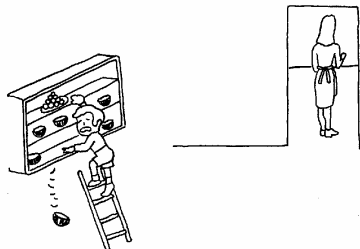


図 1-1 「はしご」場面の線画

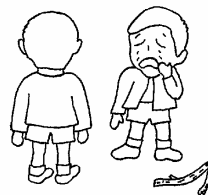


図 1-2 「泣いている子」場面の線画



図 1-3 「かけっこ」場面の線画



図 1-4 「砂浜」場面の線画

**言及内容の検討：** それぞれの絵についての母子の語りの遂行時間が異なるため、語り時間の 1 分あたりの指さし時間を計測した。指さしは、母子が絵に直接接触しても触れなくても絵の中の対象を示しているときにカウントした。その意味では、人差し指でなくても、また一本の指が示されていなくても、対象を指すと同定された際には「指さし」と判断した。逆に、人差し指が絵に触れていても、指し示す対象が同定されないときにはカウントされなかった。さらに、語りの遂行中の絵の位置（母、子、母子の間）遂行中に誰が絵に手をかけているか（母、子、双方、誰も）について、研究参加者の母子ペアでもっとも時間比率の高いカテゴリを採用した。それぞれの地域の全参加者のうちの各カテゴリにコードされた比率を算出した。

## 結 果

**絵の位置と子どもの絵への接触：** 課題遂行中に、絵を母子のどこに置いていたかを示したものが表 1、また、子どもが絵に手をかけた比率を示したのが図 2 である。地域を問わず、多くが絵を母子の中間に置いており、母親の前においたのは東京で 3 組、米国で 1 組のみであった。子どもが絵に手をかける比率が最も高かったのは中国、低かったのは米国であった。中国では母子が並行して座って、その間に絵を置いて子どもに比較的自由に絵をもたせたり触らせたりすることが多いことが観察された。米国では子どもの近くに絵を置くが、後ろから腕を取るなどして子どもに直接絵に触れさせることは少なく、このことは指さしの生起を抑制している可能性も示唆していると考えられた。

**母子の指さしの生起：** 4 枚の絵全体の試行時間の 1 分あたりの母親の指さし時間については、有意な地域差は示されなかった ( $F(2, 55)=1.04, ns$ )。子どもについては有意な地域差が示され ( $F(2, 55)=8.92, p<.001$ )、下位検定の結果、中国の子どもが米国の子どもに比べて指さしをする時間が有意に長かった ( $p<.05$ )。

表 1 課題遂行中の母子間の絵の位置

	母親	間	子ども
日本	3人	10人	7人
中国	0人	14人	6人
米国	1人	9人	8人

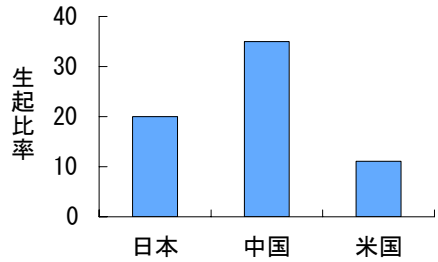


図2 子どもが絵に手をかける比率

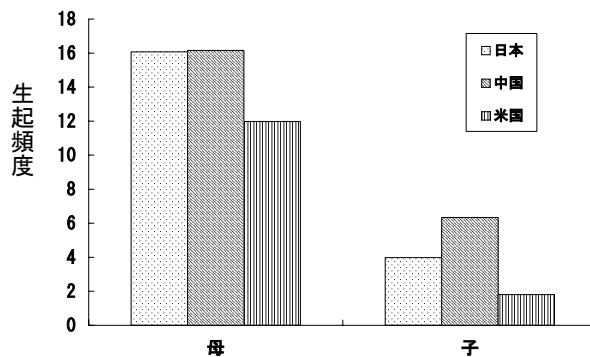


図3 1分あたりの母子の指さしの生起頻度

**指さし遂行時の発話内容：** 事例1は、米国の母子 US-17 のはしご場面の指さしと発話の一部を示したものである。発話の下線が指さしの生起した箇所であった。その特徴を見ると、母親の指さしは場面の物語を語るなかで主語(1-2, 1-3, 1-4)や目的語(1-7, 1-9, 1-11)を指し示したり、この場面で重要なアイテムとなるはしごに登ることの危険について述べたりする(1-8)発話と連動して生起していた。一方、子どもの側の指さしは、母親の発話に対する疑問や確認が生じた際の質問における目的語を示す(1-5, 1-9)形で生起した。母親が子どもを後ろから抱くようにして腕を押さえる体勢で遂行したこのケースを考えると、課題遂行中には全体をとおして絵に触れたり指さしをしたりすることは好ましくはないようだが、自分自身の発話時は指さしが容認される時間と考えられた。

事例 1 米国の母子のはしご場面での指さし (US-17)

- 
- 1 M: He probable really shouldn't be doing that. (中 略)
- 2 M: Because his mother's back's turned to him. 8 M: That's a little bit dangerous by
- 3 M: So she doesn't know what he's doing. by climbing up there.
- 4 M: He's climbing up and he's trying to get 9 C: Is he gonna get that?
- something. 10 M: He's trying to.
- 5 C: What, that?
- 6 M: I think he's trying to that a cup. get all the way up to the top of the
- 7 M: But see what happened when he got up there, ladder, so he can reach some cookies.
- and tried to get the cup?
- 

事例 2 日本の母親のはしご場目での指さし (JK II-4)

- 
- 1 M: 何してるこの人, 何してる誰? (中 略)
- 2 C: お母さん。 6 M: じゃあ, 誰のお茶碗わかるかな?
- 3 M: お母さん, こっちは誰? 7 C: お母さんで, お父さんで, 子ども
- 4 C: 御飯のお茶碗持ってきて。 で, て, それでお兄ちゃん。
- 5 M: ああ, お手伝いしてるの, ほんと, 8 M: うん, 危ないね, 何に乗ってる?
- つまみ食いじゃないの, 違う? 9 C: はしご?
- 

事例 2 は、日本の母子 JK II-4 の同場面の指さしである。母親の指さしは子どもに向けた質問の目的語(2-1, 2-3, 2-6)とはしごに登ることの危険(2-8)についての発話と連動していた。子どもは、こうした母親の質問に対する応答で、絵画中の人物の意図の方向(2-4)や対象物のひとつひとつの所有配分(2-7)を示す指さしを生起させたことが特徴であった。

上記の 2 ケースの母親の指さしは、発話の主語や目的語と連動して、また場面の中心テーマの示唆する形式で生起するという点で共通性が示された。子どもの指さしには、その時間の長さ(図 3 参照)と同様に地域ごとの特徴が示され、米国の子どもは全体的には絵に触れることは抑制されていたが、母親と同様に発話と同期する形で指さしをしていたのに対して、日本の子どもは母親の質問への応答の際に必ずしも発話で言及しきれない細かい部分にも触れ、発話を補足するように発せられていた。中国の母子の指さしについては典型例を提示してはいないが、母親の指さしには日本、米国と同様に発話や中心テーマとの連動性が示された。その一方で、子どもについては指さしの時間が長かったことにも示されているように、課題遂行中に絵に触れたり指さしをしたりすることが多く、研究参加者全体をとおして発話内容や発話の有無を問わず出現することが観察された。また、母親も子どもの頻

繁に生起する指さし行動を抑制することは少なかった。

## 考 察

本研究では、日本、中国、米国の母子の語りとともに生起する指さし行動の違いを明らかにするために、他者との対立的な人間関係を暗示する4枚の線画を提示して、母親と子どもそれぞれの発話および指さし行為によりどのような情報に触れ、共同でどのような語りを構成していくのかを検討した。

指さしの長さや発話との対応からそれぞれの地域を比較した結果、母親の指さしについてはその量も機能においても大きな地域差は示されなかった。子どもの指さし時間は中国、日本、米国の順に長かったが、それぞれの発話行為との対応には共通点もみられた。米国の子どもは絵に触れることを母親に抑制されていることも理由となって指さし時間は短かったが、生起のしかたをみると発話の主語や目的語と同期していた。日本の子どもの指さしも発話と連動して生起するものに加えて、対象の配分や線画内の人物の発話の方向といった、言語行為では表現しきれない詳細を補足するための指示表現として機能するという特徴が示された。中国の子どもの指さしは、母親が比較的自由に絵に触れさせることも依存して、発話と同期するほかに発話内容と連動せずに生起することも母親の発話時にはあった。これらの指さし機能および量の地域差は、換言すればそれぞれの地域の語りのスタイルを反映しているとも言え、発話行為における指示機能の強調および補助という意味では共通の役割を果たすとも考えられる。

指さし時間の長さの違いは、母子の語り行為の主導性を反映しているものと考えられる。米国ではまずは親の話や聞き形で物語が語られ、交代して子どもに順番が回されて親の示した語りをモデルとして論理的にことばで語る機会が与えられる。日本では親の質問や手がかりに回答する形で子どもは語りへの参加を促進され、自分が線画のなかの視点に立って語り、状況における関係要素すべてには客観的な言及をしない傾向がうかがえた。中国では子どもに語りの主導権をとらせて、自身で試行させて親が回答する形で進めるが、そこで子どもに獲得させるべきテーマは親が明確に言及していた。それぞれの地域の母子の語りの共同行為の参加のあり方のなかで、問題状況や状況の選択、対処のしかたについてのスクリプトが子どもによって獲得されているのである。

質問、反復、フィードバックなどの語り口を使用した母子の共同行為のなかで、子どもを巻き込み認識の枠組みとしての文化的スクリプト(東, 2004)を形成させるというやりかたには、文化を超えた共通点が示された。そこには母子双方が語りのなかで選択され提示される情報を相手に十分に理解させるスクリプトを示すために、語りを強調させ補足するための道具として指さしが重要な機能を果たしている。親が適切な使用を獲得させるためのモデルを示し、子どもを共同行為に参加させ学習環境を調整したり問題解決の手がかりをあたえたりする(Rogoff, 1998)ことで、それぞれの地域や生活文化に適応的な判断や行動を学習させているものと考えられる。

## 引用文献

- 東 洋. (2002). 社会的判断の国内下位文化による変動の研究:文化間変動因と文化内変動因の交差妥当化の試み. 平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告者, I-v.
- 東 洋. (2004). ライフ・スクリプト比較研究の文化心理学的位置づけ. 平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 1-11.
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fivush, R. & Wang, Q. (2005). Emotion talk in mother-child conversations of the shared past: The effects of culture, gender, and event valence. *Journal of Cognition and Development*, **6**, 489-506.
- 柿沼美紀. (2001). 母親の語りに見られる地域差の検討. *発達研究*, **15**, 56-61.
- 柿沼美紀・上村佳世子・静進. (2006). 文化的学習の場面としての母子の語り(1)—日本・中国・米国における非言語的情報選択—. *発達研究*, **20**, 13-22.
- Kakinuma, M., Uemura, K., Jing, J., Jin, Y., & Mayuzumi, M. (2005). Mother's moral messages to her children through story-telling sessions: Chinese values judge right and wrong, Japanese morals emphasize harmony. *Poster presented at Childhood 2005 Oslo, Norway*.
- 小椋たみ子. (2005). 前言語コミュニケーションの発達. 岩立志津夫・小椋たみ子(編) *よくわかる言語発達*(pp.22-25). ミネルヴァ書房.
- Rogoff, B. (1998). Cognition as a collaborative process. In D.Kuhn,& R.S.Siegler (Eds.),*Handbook of child psychology:Vol. 2.Cognition, perception, and language* (pp.679-744). New York: John Wiley & Sons.
- 上村佳世子・柿沼美紀. (2006). 文化的学習の場面としての母子の語り(2): 東京・山形・沖縄における社会的相互行為. *発達研究*, **20**, 23-32.
- Wakabayashi, T., Fernald, A., & Kakinuma, M. (1999). What, how and why?: Japanese and American mothers' questions in joint storytelling sessions. *Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN*.